

# 【開催報告】シンポジウム「金澤町家研究会のこれまでとこれから」

**開催主旨：**NPO 法人金澤町家研究会は、今年、設立から 20 年目を迎えました。節目にあたり、これまでの活動を振り返りつつ、今後の金澤町家研究会の活動の展望について皆様との意見交換の場としてシンポジウムを開催しました。なお、本シンポジウムは全国町並み保存連盟北陸・甲信越ブロック大会を兼ね開催いたしました。

## ◆シンポジウム「金澤町家研究会のこれまでとこれから」

日時：2024 年 6 月 22 日（土）13 時 30 分～17 時 30 分

会場：金沢学生のまち市民交流館交流ホール

≪第 1 部≫ NPO 法人金澤町家研究会 令和 5 年度の主な活動報告

≪第 2 部≫ パネルディスカッション／意見交換

テーマ『金澤町家研究会の歩みとこれからの展望』

### ◎パネリスト

岡崎篤行・NPO 法人全国町並み保存連盟理事、新潟大学教授、博士(工学)、新潟県都市計画審議会会長  
白石英巨・金沢大学人間社会研究域地域創造学系講師、博士(工学)、金沢市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員  
林 正人・林建築設計工房代表、一級建築士、歴史的建造物修復士  
松本有未・ことのは不動産(株)代表取締役、宅地建物取引士、NPO 法人綴る代表理事、(一社)金澤町家活用推進機構理事

### ◎コーディネーター

川上光彦・NPO 法人金澤町家研究会理事長、金沢大学名誉教授、工学博士、石川県都市計画審議会会長

≪第 3 部≫北陸・甲信越ブロック/団体活動報告

新潟まち遺産の会(新潟)、一般社団法人雁木のまち再生(新潟)NPO 法人歴町センター大聖寺(石川)、土蔵造りのある山町筋まちづくり協議会(富山)、若狭熊川宿まちづくり特別委員会(福井)、NPO 法人全国町並み保存連盟



金澤町家研究会のこれまでとこれから

日時 2024 年 6 月 22 日(土)

会場 金沢学生のまち市民交流館交流ホール(金沢市并町 2 丁目 5-1)

【NPO 法人金澤町家研究会 令和 6 年度定例会】13 時～13 時 20 分

【シンポジウム】13 時 30 分～17 時 30 分 参加無料・要申込・定員 40 名

【懇 親 会】18 時 30 分～20 時 30 分 会費制・要申込・定員 15 名

【オブショアツアー】6 月 22 日(日)10 時～ 申込無料・要申込・定員 15 名

※申込受付は 6 月 17 日(木)午後 5 時迄です。

【参 加 申 込】会場参加、または、オンライン(Zoom)視聴

参加申込フォーム▶<https://forms.gle/3dL1t6769v9v9v9v>

NPO 法人金澤町家研究会事務局へメール・FAXにて申込

(Eメール:メールアドレス 事務局迄 参加イベントを願読ください)

(FAX: 076-233-7995 事務局迄 参加イベントを願読ください)

(QRコード)

事務局迄ください

## 【NPO 法人金澤町家研究会・川上光彦理事長 あいさつ】



私ども金澤町家研究会は活動をスタートして 20 年目に入ります。市民活動は私たちにとって手探り状態のスタートで、試行錯誤しながら現在まで来ました。当初から金沢市とも連携し活動して来ました。20 年を振り返ると色々なことがありましたが、一定の実績もあったと思っています。

今回、新潟まち遺産の会の大倉代表から 2 年に 1 回開催している全国町並み保存連盟北陸・甲信越ブロック大会を、是非、金沢でやってほしいとのお話をいただきました。これからの活動を展望するにあたり、このような機会にシンポジウムを開催し、金澤町家研究会の活動について知っていただくとともに、お互いの活動について報告し合い、元気をもらい、気持ちを新たに今後の活動に取り組みたいと思っています。

## 【第一部：令和 5 年度の主な活動報告】

### ■活動報告「金澤町家巡遊 2023」坂本英之



金澤町家巡遊は 2008 年から活動を開始し、今回で 16 回目となりました。

金澤町家研究会のメンバーを中心に外部の有志メンバーも企画会議に自主的に加わっていただき、毎年夏から秋にかけて開催しています。

15、16 年前当時の状況では、金沢の町家はまだまだあまりよく知られておらず、「町家は古い昔の建物」という認識で、町家を所有している方に交渉しながら内部を公開していただきました。当初は 1 週間ぶっ続けに勉強会やコンサート、ワークショップなど様々な催しを詰め込んでいました。徐々に市民の認知度も上がり、町家を公開するという意味合いに加えて、金沢の特定のエリアを選んで深堀りし、その地域の方たちと交流して、スタッフ自身も楽しむような趣旨に徐々に変化してきたように思います。

令和 5 年度は東山エリアにて今年の 4 月にオープンした「くろさわ文庫どんぐり倶楽部」の大型町家を拠点に 7 月 28 日-30 日の 3 日間開催、「町家の夏休み」をテーマに、子供たちに町家に親んでもらえるような謎解きや、職人さんレクチャーによる自由研究ワークショップ

プ、町家紙芝居、町家箱作り、酷暑の中でのまち歩きツアーなど、多くの方に参加いただきました。



### ■活動報告「彦三町家のひなまつり」馬場先恵子



「町家の日（3 月 8 日）」にあわせて町家について知っていただく、彦三町家を開放して近隣の方々や子供たちにも来ていただくことを目的に開催し

ました。

以前に寄付をいただいた手作りの木目込みの雛人形で、今回、金澤町家友の会、金澤町家研究会、金澤町家学生会議と一緒に企画し、雛人形の見学、町家の困り事など何でもお話しいただくような茶話会形式で飲み物・お菓子などを準備し、子供向けには紙芝居や金澤町家学生会議メンバーが考えた謎解きとジュースやお菓子も準備しました。

会場では能登半島地震の復興支援を兼ねてスイーツを販売し、売上の半分を義援金として寄付しました。

準備は、金澤町家学生会議の学生と一緒に雛飾りやポストカード型でデザインしたチラシを近所に配るなどし、小学校やこども園にも配りました。

当日は 3 月初旬というのに、猛吹雪であられの吹き付ける日でしたが、近所の高齢の 3 姉妹や年長の子供が来てくれて、一緒に謎解きもしました。

紙芝居の読み聞かせの準備をしていましたが、披露することはできませんでした。

当日は、三菱 UFJ 銀行の行員数名が社会貢献活動として来場者の案内などに協力してくれました。

来場者は少なかったですが、メンバーと一緒に考えて工夫し、楽しくできたイベントと思います。



## ■金澤町家流通コーディネーター事業の報告

事務局 古村尚子



金澤町家流通コーディネーター事業は平成17年以降継続している事業で今年14年目に突入しました。金澤町家研究会メンバーで構成されるコーディネーター8名（大学教員、建築士など）＋事務局1名が活動しています。

主な活動は、金沢市歴史都市推進課との定例会やコーディネーター間の情報共有や意見交換を行う流通部会活動、建築士による町家の現況把握のための現地調査、登録者からの相談対応や物件紹介・案内、その他、担当地区を中心としたパトロールを適宜行うなどしています。オーナー（金澤町家所有者）登録は累計132件、ユーザー（金澤町家利活用希望者）は登録累計343件です。

登録者の傾向について、オーナーについては約70%が市内在住者で、その多くが親からの相続、売買希望は全体の約60%、賃貸希望は40%です。

ユーザーは全体の53%が市内在住者で、12%が金沢市以外の県内在住者、35%が県外からの登録です。購入希望は47%で賃貸希望は29%、物件次第で検討するは24%です。

これまでに大きな転換期は3つ（北陸新幹線開業、コロナ禍、能登半島地震）あり、ユーザー属性では事業開始当初は市内在住者が半数以上で、北陸新幹線開業後は県外在住者の割合が増え、コロナ禍以降はユーザー登録者が減少傾向にあります。ユーザーの利用用途としては、事業開始当初は住居利用（併用住宅含む）が多数でしたが、北陸新幹線開業前後には店舗利用（事業用）が増加

しました。コロナを機に事業利用は減少しましたが、最近では微増傾向にあります。

金澤町家情報バンクはWEB上の物件サイトで平成17年より金沢市が管理・運営し、コーディネート事業の受託後は金澤町家研究会が物件情報の登録受付や掲載作業を行っています。誰でも閲覧することができ、成約率は約80%と高くなっています。

マッチングの実績は累計で63件あり、オーナーとユーザーの結びつけや、コーディネーター等の助言により所有者自らが活用に至ったもの、不動産会社を紹介し積極的な流通に至ったものも含まれます。

金澤町家流通支援に関わる金沢市の施策として「金澤町家解体等事前届出」制度があります。町家を解体または大規模改修に着手する90日前までの届け出をお願いするもので、解体を考える所有者からの申し出や相談について事前に情報をキャッチできるようになり、流通や活用について考えてもらうような仕組みができました。2016年には金澤町家情報館（金沢市管理・運営）が開館し、市の職員と金澤町家研究会専任スタッフが常駐、金澤町家に関する総合相談窓口および改修のモデルとして内部の見学もできます。

問題や課題としては、最近になり登録有形文化財や市指定保存建造物、それに匹敵するような歴史的に貴重な町家の売却相談が増えています。売値が高額なことや文化財としての維持管理負担も大きいこと、自治体による保存や活用が難しい場合は、民間による保存・活用の検討が必要なため、地元の方では購入者・活用者を見つけにくく、首都圏などからの投資により利活用が進むケースもあります。今後も、積極的な他地区への情報発信が必要と考えています。

また、当初は空き町家の活用を目的としていたものが、投資目的とする流通のお手伝いとなっていないか、見極めることも大事です。

これまでの蓄積する成功事例や登録情報を活用し、継続的に取り組むことで効果がより表れると思います。



## 【第二部：パネルディスカッション／意見交換】

### ■金澤町家研究会の活動の歩み：川上光彦

金澤町家研究会は2005年に任意団体としてスタートし、今年20年目の節目となりました。手探りに試行錯誤し事業を進めてきました。



活動“初動期”における歴史的建築や町並み保存は文化財行政の延長で、京都で町家を活用するという方向性が始まり、我々よりも10年程先行して活動していた京町家再生研究会に触発され、金沢でも市民活動としてスタート、2008年にNPO法人化し、今に至っています。

“展開期”には調査研究と町家の利活用実験、2008年より「金澤町家巡遊」の開催、2010年に「優良金澤町家」認定開始、職人によるワークショップなども行いました。

“安定期”は市受託事業「金澤町家流通コーディネート事業」の継続や、文化庁委託事業調査により、市への提言から条例の制定に結びつくきっかけとなったものもありました。「金澤町家巡遊」については毎回テーマを変え実施、マンネリ化しないように工夫されています。

これまでの活動を総括すると、金沢市が歴史的な建築物の改修・利活用を本格的に始めるときに我々も市民活動としてスタートして、現在まで連携してきました。

今後の活動の展望は、改修と利活用の支援について、継続的に活動していく必要があること、また、改修や利活用システムの構築については、法制度がまだまだ歴史的な建築にとっては厳しいところがあり、検討していく必要があるため、いろいろな仕組みや工夫も必要と思っています。

今回のように他地域とも情報交換の機会を増やして、我々も他の地域に行き、交流したいと思います。

### ■建築設計士からみた金澤町家研究会の歩み：林 正人

平成8年(1996年)に「金沢職人大学校」が開校し、学校を創るためにはその前から市による準備が必要で、「東山ひがし」が重要伝統的建造物群保存地区に指定されたのが2001年、その4年後の2005年に金澤町家研究会(金澤町家継承活用研究会)が設立され、2009年に金沢市の



「歴史都市」第1号認定ということで、歴史都市になるまで金沢市が約20年の間着々と施策を続けていた時期に研究会の設立があります。

1990年バブル期以降、新築着工が減り、住宅リフォーム業が増え、1990年代後半から住宅改修や“リノベーション”と言われるようになりましたが、2000年代に入っても建築設計業界ではそれは日陰の存在で、事業性のインパクトとか、創造性という意味では新築の方が上というのは現在もあり、私も2005年に事務所開設しておりますが、個人的に改修を仕事にしてよいのかというイメージでした。職人が胸を張って仕事ができる歴史的な町であったことが設立の背景としてあるのではないかと思います。

金澤町家研究会の活動は、「継承」と「利活用」が2本の柱で、「継承」として、町家塾、講演会、見学会など企画内容はしっかりしているのに参加者が少なく、集客することや機会を集約することも必要と思います。「活用」として「金澤町家流通コーディネート事業」は公的な立場で信頼されていると思いますが、便利な不動産仲介業にも思われている気もするので、静的な活動から動的な活動に移行していくのもよいと思います。

町家を好きになってもらう、その活動が金澤町家研究会の一番得意な活動で、とても成果が出ており、金澤町家巡遊はそれを強く感じ、とても安定感があります。

「NPO(特定非営利活動法人)」というのは社会貢献活動が存分にできる場所であり、公正な信頼される団体というイメージなので、このような立場を使って新しいことをもっと進めていくとよいと思っています。

### ■金澤町家の流通と活用—当社の取り組みと金澤町家研究会への期待：松本有未

2004年の大学卒業後に出版社へ勤め、古い建物には興味があったので、2006年に菊川で長屋を借りて住み始めました。その頃は不動産情報をネットで探す時代ではなく、主にフリーペーパーや有料雑誌で情報を探し、それらは広告媒体のため、借り手がつきやすいような物件が掲載されており、町家や古家は載っておらず、不動産屋の窓口に飛び込みで入りましたが、古い家に若い女性が住むことを不思議がられ、怪しまれたのを覚えています。



出版社を退社後は、編集業の延長で物件の記事を書く仕事を面白いと感じて不動産業界に入り、そこで宅建士資格を取得、2014年に「ことのは不動産」を開業しました。今年がちょうど10年目になりますが、賃貸・売買合わせて約100件の町家を仲介しました。

開業して早々に関わった3軒長屋の町家の賃貸物件は、所有者さんがそれまで貸家としていたもので、壊してアパート建築の話もありました。しかし、金沢市には町家を改修する際の補助制度もあるので、改修費と完成後に想定される家賃を計算したところ、アパート建築よりも町家を残す方がよいということになり、町家を事業用として利用したいという需要も多かったため、住居兼店舗として募集しました。

コロナ直前に賃貸契約いただいた尾張町の大型町家の物件は、新幹線効果とインバウンドの影響で町家の需要が高まっていた頃ですが、一方で大きすぎる町家の活用は大家さんの負担も大きく、借主側の改修費負担も大きいため、活用が進まず、難しい面もありましたが、現在、レストランとして活用されています。

2019年には自社で町家を買って、直して、再販売する「編むプロジェクト」を開始しました。一般的な不動産としての建物は築年数が浅いほど良く、年数が経つにつれて落ちていくように価値が決められますが、建物が残ってきたストーリーに価値がつけられないか、所有者の思いを汲み編み直すイメージで取り組みました。相当傷んでいたため、改修費は安い新築住宅と同等の金額となりましたが、町家暮らしに憧れていた方に購入いただき、お住まいいただいています。コロナ明けはリモートワークが主流となり、移住者も増えたため、県外から町家への移住者も増えた印象です。

金澤町家研究会の設立以前の頃は、所有者も町家に価値を見い出しておらず、不動産業者も価値が無いものとして扱っていましたが、金澤町家研究会の取り組みや、市の補助金制度、新幹線効果や移住者の増加などの外的要因もあり、町家の価値が認知されたと思います。また、事業用だけではなく居住用の選択肢の一つとして定着したと思います。

町家の耐震改修工事については情報も少なく、需要が出てきたからこそ、安易に扱う業者も増え、基礎的な知識がないような改修業者や不動産業者もあり、勉強会をしていただけるといいのではと思っています。また、税制の矛盾も町家の流通を阻害している要因となっていま

す。

## ■研究者からの現場報告：白石英巨

2年前に金沢大学に着任するまでは民間のコンサルタント会社で発展途上国のインフラ開発支援、都市交通マスタープランなどの仕事に携わっていました。



大学の頃から東南アジアの町家（ショップハウス）の調査をしています。カンボジアのプロンペンでは、4階建ての中層の町家（ショップハウス）が建ち並び街区を作っていますが、真横に高層の建物が建ち、景観が破壊される問題も起きていますし、住民が立ち退きに合い、コミュニティが無くなるなどの都市問題や、景観や住人の生活変遷、建物の図面を取り、人がどう住んでいるかなど調査しています。

金沢へ来ることが決まったときに「金澤町家巡遊」イベントに参加し、川上先生やメンバーの方とお会いし、金澤町家研究会に入会しましたが、まだ多くの活動はできておりません。

大学教員、研究者としての様々な経験や知識を活用することで、諸活動や市民の意識づけに繋がり、金澤町家研究会の活動に貢献できるのではと考えています。

私なりに研究者として金澤町家に関係する案として、町家が具体的にどのような要因で減っているのか、特性による町家の活用、状況の違いなどから特定できれば、施策に反映、活用できるのではないかと思います。また、歴史的な景観の保全・継承に向けて具体的にどのように町家が残っているのか現状を把握すること、実際に町家がどのように活用されているのか可視化するなどで整理ができれば、これから町家を活用したい方の参考になると思います。それらは、金澤町家の特徴を捉えてどのように残していくのか研究と一般向けの指針、情報提供になるのではと考えます。

金澤町家研究会の知識、経験、ネットワークを活用して、研究に展開し、個人として研究者として成果を広く一般に公表して町家の利活用に役立てたいと思います。

## ■新潟まち遺産の会の活動から：岡崎篤行

新潟は金沢や京都と同じく空襲を受けておらず、歴史的港湾都市ですが、全国的にも新潟市内でもそのイメージは定着していません。新潟大火や新潟地震もありまし

たが、被害は限定的だったため、多数の町家が残っていますが、2000年頃まではその価値の認識も低く、大倉代表が孤軍奮闘で保存活動を行っていたところに、私が新潟大学に着任しました。



学生たちと調査を始め、「下町」「花街」「お屋敷町」の界隈には江戸時代の市街地が残り、国指定文化財の旧税関、萬代橋、県庁議事堂、白山公園、旧齋藤家などが狭いエリアに残っていることがわかりました。

ある住宅専用のミセ部分のない町家について、見学会や活用を探る取り組みを行っていたところ、他からも相談が来るようになり、この活動が発端で2004年に「新潟まち遺産の会」が発足しました。

大正10年建築で副知事公舎として使用された洋館付き和風住宅が売りに出される際には、他団体と働きかけレストランとして新たに活用され、廻船問屋の別荘が手放される際にも保存運動や署名活動により、市が購入し国の名勝となるなど、様々な活動をしてきました。金沢で言うところの茶屋街である「花街」のマップを作成し、毎年、一般向けのお座敷体験なども企画しました。

会として色々な運動を行ってきましたが、上手いかなかったものも上手いあったものもあります。一部の指定文化財を除いて新潟では歴史的なものを大事にしなければならぬという意識はほぼ無かったと思います。

NPO活動の分類では「支援活動」の技術支援的なことはメンバーが個人的に行っていますが、金澤町家研究会の行っている不動産流通支援はできておりません。「交流活動」のネットワーク形成は比較的できています。

活動に対して人出が足りないところもありますが、金沢の活動はとても充実していますし、我々も市民への普及マップはできていますが、不動産的なところや、子供向けの町家巡遊のような取り組みもこれから充実させていきたいと思っています。

## ■パネルディスカッション／意見交換

(川上)

林さんは建築士として金澤町家に携わっておられ、新築よりも非常に手間がかかるように思いますが、関わられている想いなどお聞かせください。

(林)

建築設計は社会に貢献できる仕事のひとつと思ってやっており、町家に拘ることではないが、古い町並みとその生活を継承していくことが、町の魅力を活かして歴史を積み上げていく中で重要だと思いますし、実際に愛着をもって町家に暮らしている方も多く、それが面白さと思います。

(川上)

林さんの改修設計されたものを見るとその思いを感じます。今後の金澤町家研究会の活動として動的な活動とありましたが、具体的に聞かせてください。

(林)

金澤町家流通コーディネート事業はたくさんの登録者がじっと待っているような感じもあるので、建築設計の立場から言うと、建物に対する活用の案や、求める条件により建物の活用展開を絵にして提案すればわかりやすいと思います。

(川上)

新しい視点ですね、具体的にアドバイスをしようと思うと、知識や能力を身につける必要があると思いますが、今後の展開に非常に良いアドバイスをいただきました。

松本さんの「編むプロジェクト」はかなりのリスクもあると思いますが、その思い切りの良さはどこから来ていますか。

(松本)

金融機関へ借入れの申込に行くとき「大丈夫ですか」と毎回言われ、自信があったものも無くなってきますが、需要は確かにありますし、沢山売れなくても、ひとりが気に入ってくれば良いと思い、不安はありましたが、確信はありました。

(川上)

金沢だけを対象にしてもなかなか研究になりにくいと思いますが、白石先生には研究的な活動を提案いただければ嬉しいですね。

(白石)

どのように展開するかにもよりますが、施策を考えるときのベースの情報としての活用や、例えば観光地における人の動きを可視化するなどで、実際にその空間がどのように使われているかなどの理解に繋がり、研究としての展開があると思います。

(川上)

新しいアイテムや技術を駆使しながら非常に面白いと

思いますので、研究会で関わるができることは是非やっていたきたいと思います。

我々は当初より金沢市から委託を受けるなど連携していたため、岡崎先生の新潟の事例での行政や社会に訴えるような運動は素晴らしいと思います。あらためて金澤町家研究会の活動の特徴や提案などあるでしょうか。

(岡崎)

新潟は行政的な制度が整っていなかったため運動せざるをえず、金沢の場合は行政の制度もあり、市民と行政が一緒になり素晴らしいと思います。他団体とのネットワークや石川県、北陸、全国的な活動が広がっているとは言えない状況なので、一緒に取り組みさせていただけたらと思います。

(川上)

歴史的なまちなみの活動は行政にも認められつつもありますし、金沢の場合も市民にも浸透しつつあります。

(会場からの質問)

耐震性についての支援、防火性能、気密性向上などの改修に補助や支援があるか具体的に教えてほしい。

(林)

防火性能に関する助成制度は、伝統構法の小舞泥壁は防火性能が認められており、在来工法の新建材でつくる防火性能と2通りあるとすると、小舞泥壁はその上に下地を貼ることも含めて補助金の対象ですが、石膏ボードの防火壁は補助対象にはなりません。伝統構法は気密性よりも通気性に特徴があります。現代的なニーズに合った町家改修を求められることもあるので、その場合は、断熱材を入れたり気密、遮熱シートを入れたり、新建材も足しながら町家の良いところにプラスの設計を行っています。

(川上)

税制上の矛盾について松本さん説明いただけませんか。

(松本)

相続人が被相続人の住居以外の町家を売却する際に譲渡所得税が発生しますが、利益が出て3,000万円まで非課税とするという特例を受けられるのは建物を耐震構造にする、もしくは、更地にして売却した場合だけ適用されるので、好立地の町家や敷地が大きく売値が高い場合、町家を残したいと思っても、更地にして売った方が税金がかからないこととなります。

(川上)

歴史的な建物を保存、活用しようとする立場から言え

ば問題のある仕組みで、国の制度なので地方ではなかなか変えにくいですが、市民的な意識も変えて政治力で国の制度を変える必要があると思います。

(会場からの質問)

白石先生のショップハウスについて教えてください。

(白石)

ショップ+ハウスで「町家」と言葉としては同じですが、東南アジアの諸都市にあり、基本的には1階が店で2階が住居で、家族で生活するのが一般的で、プノンペンでは中層化していますが、ベトナムでは日本のようななぎの寝床のようなものもあります。リノベーションしてカフェとして活用するなど、歴史遺産を継承しながらまちづくりに活かそうという流れでは同じです。

(会場からの質問)

金澤町家流通コーディネート事業の報告で、活用の内容や登録者の属性について教えてください。

(事務局・古村)

町家の利用希望登録者のうち、半数強が金沢市内在住者で、金沢市以外の県内在住者が12%、県外や海外が35%です。新幹線開業後は県外の方が増えてきました。活用については、事業開始当初は居住用が多かったですが、段々事業用も増え、コロナ禍以降は事業用が減り、居住用が微増しています。

(川上)

京都の場合、国内外から投資の富裕層が活用している状況ですが、金沢の場合はまだ市民や県内在住者が購入、活用し、それ中には若者もいます。しかし、文化的な建物になると改修費を含むとかなり高額のため、地元では購入、活用は難しく、企業の社会的な活動で使ってもらえるとよいですが、それほど期待しにくいので、大都市や国外からの活用してもらえない印象です。金沢でも投資的な動きが見られるようになり、我々としても色々と考えながら進めていきたいと思っています。



(会場からの質問)

20年活動してきた積み重ねのプラスマイナスはありますが、組織の若返りについて、どのように感じますか。

(岡崎)

同じ問題は抱えており、新メンバーを増やすためのイベントやきっかけづくりだと思います。金澤町家研究会は、友の会や学生会議として活動を広げていらっしゃるね。

(川上)

まだ友の会は独自に活動するには至っていないので、今後の課題です。学生の場合は何年か活動すると卒業してしまいますから、年度ごとにメンバーが変わり、活動のレベルも違います。やむを得ませんが、友の会も学生会議も自立性をもって活動し、町家研究会が連携、支援するなど自発的に楽しく活動していただけたらと思います。

最後にお一言ずつお願いします。

(林)

若い会員さんに企画運営をして戴ければ、若い方に訴え掛けられると思います。また、町家の歴史が消えつつあるので、子供向けの企画は大切だと思います。事業も多く密度が高いので、事業の集約や報酬を充実させ、新しい企画にチャレンジできるとよいと思います。

登録文化財のように名誉的価値はあるが補助金の無いものに対して、基金の利用や資金を確保し、モデル事業として行うとか、建築的ではありますが、伝統構法に耐震性があるということ、耐震改修モデル事業として進めるなど具体的な作業が今後にも繋がると思いました。

(白石)

まだ活動に積極的に参加できていないわけではありませんが、楽しく活動できればと個人的に思います。今は賃貸マンションなので、町家暮らしをしたいと思います。

(松本)

昨年立ち上げた NPO 法人は菊川の空き家を地域に共有するという主旨で、会費は共有費として使用し、大人は月額 5,000 円、35 歳以下を 3,000 円とし、若い方にも入っていただきたいので会費に差をつけています。若い世代は社会貢献したいという意識が強いように思うので、今抱えている問題をオープンにしていくと、若い方が力になってくれる気がします。

(岡崎)

北陸・甲信越ブロック大会は2年に1回の活動ですが、

仲間を増やしていきたいと思っていますし、いずれ金沢でも全国町並みゼミがあるといいなと思っています。

(川上)

今回のシンポジウムは、今までの活動を振り返り今後の活動を展望するという事で開催しましたが、刺激も新規の提案もいただきましたので、これからもメンバーと一緒に頑張っていきたいと思っています。

## 【第三部：北陸・甲信越ブロック/団体活動報告】

### ■新潟まち遺産の会(大倉宏)

旧第四銀行住吉町支店の保存運動や界隈の町家の解体移築支援のため、署名運動や行政への働きかけ、募金活動等を契機とし、町家や歴史的建築物の価値や魅力について知ってもらうことを目的に 2004 年に会が発足しました。町家や洋館付き住宅の紹介、古町花街のマップ制作、毎年の花街イベントや、最近では萬代橋周辺の景観に関する勉強会なども行っています。

私たちの会も今年で 20 周年となり、まちづくりには歴史を大事にすることとともに、賑わいの創出も大切だと思いますので、「みなとまちの賑わいをとりもどす」と題したシンポジウムを 8 月に予定しています。

### ■一般社団法人雁木のまち再生(関由有子)

2007 年に高田駅近くにある間口 20m、奥行 50m の大型の商家の改修設計に関わり、「高田小町」が開業し、ここから町家の再生、活用が始まりました。

この頃、民間でも古い映画館やミュージアムの町家再生が行われましたが、NPO や公共だけでは町家は残っていかないので、2015 年に一般社団法人雁木のまち再生を立ち上げて、町家を取得し活用者とのマッチング事業と、営利活動可能な合同会社も設立し活動しています。

これまでに関わった町家をマップに落としてみると、公共施設、飲食店、本屋、カフェなど、若いメンバーの価値観を活かし、随分事例が増えてきました。

### ■NPO 法人歴町センター大聖寺(篠原隆一)

1994 年に前身団体がスタートし、2001 年に NPO 法人化して、約 30 年の活動の歴史があります。町家については加賀市に町家再生室がありましたので、私たちは主として武家屋敷の再生を進めました。

ここ数年は建物ではなく、子供たちに大聖寺の素晴らしさを知ってもらいたく、子供を対象としたふるさと学



習が中心になっています。

2021年3月に大聖寺を中心として歴史都市認定を受けましたので、2022年4月に歴史都市記念フォーラムを開催し、今年3月の北陸新幹線延伸に向けて、2022年から歴史都市セミナーとして連続講座を行い、現在も継続しています。

マップの制作や「ふるさと学習歌巡り」を学校に配布するなどして、大聖寺の良さを知ってもらう活動を行っています。

#### ■土蔵造りのある山町筋まちづくり協議会(筏井晴夫)

高岡市は2つの国宝寺院、2つの日本遺産、「山町筋」「金屋町」「吉久」3つの伝統的建造物群保存地区のある歴史都市です。

町並み保存の取り組みとして町家の修理事業や銀行等の跡地を活用した防火施設、防火水槽整備事業、無電柱化、道路修景整備事業などがあります。

山町筋というのは「御車山」を持つ町内ということで、元々は土蔵造の本屋、新聞販売店だったところを市が取得し、鉄筋コンクリートの土蔵風の建物を建てて「高岡御車山会館」として活用しています。

「山町ヴァレー」は「谷」と「シリコンバレー」を掛け合わせて人の集まる場所という意味で、10年以上前から空き家となっていたランドマーク的存在の元文具店の建物を第三セクターの不動産会社が取得し、八つの蔵にそれぞれテナントを募集し活用しています。

10年以上空き家だった町家を、若い方がゲストハウス開業のため改修するなどの活用も進んでいます。

#### ■若狭熊川宿まちづくり特別委員会(宮本哲男)

江戸時代から海産物を京都へ運ぶ幹線ルートの宿場として発展し、90世帯240人が暮らす非常に小さく、周囲を自然に囲まれた場所です

1975年(昭和50年)に河内川ダムの工事により水没する茅葺の家を調査するため福井大学の研究者がたまたま熊川宿を通られて、熊川宿を発見したということです。

1981年に町並み調査が行われ、その年に熊川宿町並みを守る会が設立されましたが、住民はあまり乗り気ではなく、その後、熊川小学校の生徒と一緒に町並みの調査を行って、段々と住民にも浸透していきました。

平成7年に若狭熊川宿まちづくり特別委員会として活動を始め、翌年に重要伝統的建造物群保存地区に選定さ

れました。

ハード面の調査や町並み通信「鯖街道熊川宿」の発行、平成27年には日本遺産に認定され、熊川まちづくりマスタープランの策定、熊川城跡の整備、防災まちづくり計画の策定などしました。

空き家対策として、東京から移住された方が街道シェアオフィスを開業するなど、行政、民間事業者、地域が連携し、空き家活用を進めています。

#### ■NPO 法人全国町並み保存連盟(山本玲子)

1974年に、「妻籠を愛する会」「有松まちづくりの会」「今井町を保存する会」の3団体で設立しました。その頃、文化庁も伝建制度の準備を進めていたため、全国に呼び掛けたところ5団体が加盟し、1975年に「全国」町並み保存連盟に改称し、2003年にNPO法人化しました。

伝建制度が出来た当時は制度そのものがどのようなものか分からず、金沢、倉敷、高山は既に条例が出来ていましたが、その条例と伝建制度のすり合わせに悩んでいましたので、研究者、行政に呼び掛けて勉強会として「全国町並みゼミ」が始まりました。第5回の東京大会が契機となり、東京事務所が発足し、個人会員制度、瓦版の発行が始まりました。

2006年に全国町並みゼミ九州ブロック大会が開催されて以降、ブロック活動が盛んとなり、第一回北陸甲信越ブロック大会は、大聖寺で開催されました。

現在、67団体、145人の個人会員がおり、毎年全国各地でゼミが開催されるようになり、情報交換を進めながら、活動を広めることも連盟の役割と思っています。



【NPO 法人金澤町家研究会・増田達男副理事長 総括・  
閉会のあいさつ】



20年を振り返りつつ、工夫しながら歩んできたとしみじみと思い返しておりました。マンネリ感や、若返り、耐震など、多くの課題を抱えています。

皆様のご発表には、「好き」という思いがひしひしと伝わってきました。そ

の情熱に元気づけられます。

連携、拡大、ネットワークという言葉もいただきましたし、子供向けなど多くのお勧めをいただきました。

設立し、何も分からない状態で歩み始めた頃はいろいろな苦労もありましたが、その折に、川上理事長はいつも「楽しくやりましょう」とおっしゃっていました。

本日の学びを、これからの新たな取り組みに結び付けて参りたいと思います。

